

職員の皆さんへ

今回で二期目の最後の市長訓示となり、皆さんにはすでに 96 通もの私からのメッセージを読んでいただいたこととなります。

9 月の市議会一般質問で松瀬議員からこれら訓示のうち幾つかが話題となり一定の評価をいただいたことは思いがけない喜びでした。そうした嬉しさも含めて今回は、別の議員から指摘を受けた「もっとリーダーシップを」という問いかけに答える形で、私なりに考える「リーダーシップ論」について、すでに「リーダーの地位にある人」又は「これからリーダーになる人」の参考になればとの思いから敢えて述べてみたいと思います。

あまねく組織を運営する上で、そのトップに位置する立場の者には当然のことながら組織運営上の責任が生じます。これをしっかりと果たしていくための指導力が「リーダーシップ」です。その手法には様々な方法があるようですが、いくつかこれに関する著書を読んでみますと、「明確な意思表示とこれを表現する言葉の力」「自らがかもし出す推進力とチームの統率力」「困難にも挫折しない強靱な精神力と明るさ」などに要約されると思います。いずれにしても必要なのは、その組織が求める目的への方向性を指し示す役割がリーダーには求められることから、情報収集力や分析力、決断力などが必要ということでしょう。

私自身がこれらの要件を満たしているかといえば皆さんはきっと不足の点が多くあると感じておられるでしょうし、私自身も反省すべきところが多いと思っています。ただ言えることは、この訓示シリーズでも示されるように私はたくさんの言葉を連ねてきましたし、私自身の性格として「なんとかなるさ」という楽観的な反面「為せば成る」という前向きな取組み、そして撤退する場合は速やかに判断し修正してきたように自覚しています。これらのことは、当然毎月読んで頂いている皆さんの胸のうちに評価として残っていると思いますし、市民の皆さんにも私に対する色々な場面や方法で的確な点数をつけて頂けるものと思っています。

今後においては、これら励ましやご注意による批評をしっかりと受け止めて次の施策推進に活かしたいと思います。

さて今回、皆さんにお伝えしたいのは、リーダーがその立場を確固たるものにし指導的役割を安定的に果たすことができるのは、そのリーダーを支える補佐役や部下による底力のことです。いくら組織のリーダーが的確な言葉で指示を出しても、部下の諸君がこれに従って着実に任務遂行しなければ物事は前に進みません。その際、重要なのはリーダーの「意思の伝達の仕方」だと思います。中間管理職の立場の者が直属の部下に対して本市ではあり得ないこととは思いますが、例えば「上からこんな指示が来たからやっというて」という単なる「丸投げ指示」であったとしたら、それは組織としての機能の弱体化につながります。

さらに例えて言えば「市長が言っているから」とか「部長が…」などと指示されても、その果たすべき仕事への熱意が伝わってきません。

むしろ「市長はこう言っていたけど、それはこんな意味があると思うよ」とか「部長の目指すところはここだから、もっとこうしていこう」などと、それぞれの立場の者が方向性を間違えずに、さらにアイデアとエネルギーを加重・加速させていく総力こそが、目的達成には不可欠です。そして、もしも節目ごとの判断に狂いが生じてきそうな場合は、原点に立ち返って上司に確認をとるという作業も不可欠になってきます。

結論として、私が唱えるリーダー論とは、組織の構成員の全員が今立たされている立場のそれぞれのリーダーとしての資質を備え、その意欲と責務を抱いて任務に当たるということになります。指示を受けて「自分ならこうやる」という決意・決断、もしその方向性を確認するのなら臆することなく上司に「この方向でやらせてください」と相談した上で思いっきり力を尽くす姿勢が重要です。

そして最後にリーダーの重要な役割は「責任はオレが取るから思い切ってやれ」とどっしり構える上司から部下への安心感の提供だと思います。言うまでもなく市政における最終責任は市長である私にあります。そのためにも入念な打ち合わせや確認をしていただきたいし、やるからには最大の効果を引き出すために何度もキャッチボールをすることを歓迎します。私たちが今、取り組んでいる一つひとつの事業が平戸市の長い歴史の一ページに確実に刻まれているのです。その誇りと使命感をもって前進していきましょう。

「実りの秋」に相応しい季節となるよう、これからの施策や事業にもしっかりと手応えを感じられることができるよう、皆さんの奮闘に大いに期待します。ともに頑張ってください。

平成 29 年 10 月 2 日

平戸市長 黒田成彦